

年長組、第二保育期

—満五歳から満六歳—

生活訓練

第一週

年少組にあつたと同じこまが、年長組にも舉げられてゐる。休暇中の行動のゆるみを引きしめるこまといふのである。こまころで、之れは年少、年長の別はないこまだが、却つて年長の方に一層此の訓練的注意を要するかも知れない。曰く歸り仕度。曰く道具箱の整理あまかたづけ。等等。等。

第二週

第三週

こちらも、元氣溢れる子が、元氣に任せてやる勢を、靜かに落ちつかせ、調整しようといふのである。年長組の第二保育期。今こそ幼稚園生活の元氣の絶頂。なか／＼順序

を待つて徐ろに靜かにこいつた譯には、自分はしようと思つても、元氣がさうさせない。そこを、ちつこ抑へて順序を守らせ、行動を丁寧にするのである。一方は食後、一方は之れから園外へ出るこまの時。その意味からいつても、是非落ちつかせなければならぬ。

訓練といふこまには、その實質内容も、それから生ずる一般効果もある。たゞへば此の二つの週の場合、うがひの訓練、お歸りの訓練でもあるが、さういふ實質内容の他に、落ちつきといふ一般的效果が期待されてゐるのである。そして、一般的效果の方が、より大切でもあるのである。ただし、落ちつかせるこまが大切だからこいつて、落ちつきは、落ちつかせるこまが、より大切だからこいつて、落ちつきは、落ちつきといふものがあらう譯ではない。況んや、落ち

つけ／＼で訓練出来るものでもない。何か實際のこまがなければならぬ。そこが修身でなくて訓練たる所以である。落ちつけこいはいはなれで落ちつきを訓練せられるところ、そこがたゞの訓練でなく、生活訓練たる所以である。

かういふこまを特に言ふのは、幼稚園に限らず、子どもの訓練が一つの小さい行動に對して、こま／＼で行はれて、その裏の大きい本旨、目的をいつたものが考へられないのが通弊だからである。そのために、訓練が形式化したり、外面化したり、又、する方／＼しても妙に窮屈に、ぎこちないこまになつたりする。(こまいつて、本旨、目的をいふこまだけで、ばつ／＼して子／＼もが捉へ得ないようなこまは

誘導保育

第一週

年少組第二學期第一二週の本欄は、蟲に始まり蟲に終つて居て、興味を中心は實に蟲であるのに、年長組第二學期の本欄には、何ミ蟲の字の片影すらも見受けられないではない

かり言つて聞かせてゐる弊も一方にある。これも困る。此の保育案の訓練事項だつて、一々具體的に擧げてはあつたが、たゞにそのこま、そのこまを訓練しようとする列擧目錄ではない。もつ／＼大きく、一體幼兒は、さういふ風の本旨で訓練せらるべきかの、大目標があるのである。そこを見さめて貰はないミ、小乗訓練になつて仕舞つて、大乘訓練ではなくなつて仕舞ふ。大乘訓練あつての小乗訓練でなくては、たゞ口やかましく、こせ／＼した賤げに過ぎない。教育でもなんでもない。この點、し／＼御考へ願ひ置きます。

か。一つ園舎に居て、一方は蟲を中心に生活してゐる時に、たつた一歳しか違はない年長組の子供は、蟲に無關心で居られるであらうか、之はまたさうしたわけか、ミ、實際家はきつ／＼不審かられるに違ひない。是はさうである。蟲に對し